

紀

要

第 12 号

1999. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

愛知郡湖東町平柳古墳群の測量調査

北原 治・重岡 卓・辻川 哲朗
中村 智孝・堀 真人・山中 繁

はじめに

平成8年に近江歴史クラブが行った犬上川左岸扇状地についての共同研究(近江歴史クラブ1996)の過程で、その比較対象とした愛知郡東半部が注目を集めた。当該地域は「畿内型石室」・「階段式石室」等、さまざまな横穴式石室の諸形態が併存しており、古墳時代後期における墓制の存在形態を追求するうえで良好なフィールドであると理解できたのである。しかし同時に、それらの基礎資料の不足が痛感された。そこで、基礎資料の整備を当面の課題に据え、実測調査を実施することになった。なかでも、湖東町平柳に所在する平柳古墳群は、平柳集落の方々が社地として古墳群を手厚く保護してきたことにより、極めて良好な遺存状態が保たれている古墳群であり、その資料的価値は高い。そこで今回、同古墳群を対象として、分布・石室実測調査を行った。

本稿はその調査の中間報告である。執筆は調査参加者が分担した⁽¹⁾。文責は本文中に明示している。

なお、今回の調査の実施にあたっては、湖東町教育委員会森 容子氏より全面的なご協力を得たことを記して、謝意を表したい。(重岡・辻川)

1 位置と環境(図1)

平柳古墳群は湖東平野の東端に位置し、愛知郡湖東町大字平柳に所在する。この地は鈴鹿山地から流れ出る宇曾川による扇状地の扇央部の左岸にあたる。

平柳古墳群のある愛知郡東部域では古墳時代前・中期を通じて古墳は確認されていない。郡全域を見渡しても古くに出土した車輪石から荒神山に前期古墳が想定されるだけで、中期以前の古墳は皆無に近い。しかし、後期になると金剛寺野古墳群(298基)や勝堂古墳群(48基以上)といった大規模群集墳が郡東部域に造営される。かかる古墳群は愛智郡を本拠地とした渡来氏族依智秦氏が造営したとされ、旧来の技術では水田用水が確保できなかった当該地を愛知川等の大規模河川から直接灌漑することで開発

したとする説がある。

これらの古墳群では小規模な円墳に混じり、金剛寺野古墳群の百塚古墳や勝堂古墳群の赤塚古墳など直径30m前後、高さ5m前後の盟主墳と目される大型墳やそれに準じる直径20m前後の古墳が数基存在する。これらの古墳の主体部は両袖式(赤塚古墳・蝙蝠塚古墳)や片袖式(行者塚古墳)など通有の「畿内型石室」である。また、勝堂古墳群付近の寺院には竜山石の組合式家形石棺が存在する。一方、大多数を占める直径10m前後の古墳には、上蚊野1号墳や5号墳等湖東平野で多くみられる「階段式石室」を採用した古墳と上蚊野3号墳や4号墳などの「畿内型石室」を採用した古墳が存在する。

平柳古墳群が立地する宇曾川左岸扇央部に目を向けてみると、平柳古墳群を中心として東西2.5kmほどの間に祇園古墳群(6基)、祇園東古墳群(2基)、小八木古墳群(3基)などが散在している。祇園東古墳群の西塚古墳は直径8m程の小規模な円墳であり、「階段式石室」を主体部にもつ。土地条件が右岸と大差ないことから、古墳時代以降の開墾によって多くの古墳が破壊されている可能性は高い。これらの古墳群のあり方は右岸の金剛寺野古墳群と類似する。(北原)

2 分布調査の結果

(1) 群構成

平柳古墳群は、遺跡地図においては17基からなる古墳群と記載される(滋賀県教育委員会1996)。今回現地を踏査した結果、現状においては、円墳11基からなる古墳群と判断した。それらの内部主体については、今回の測量調査をおこなったA-1号墳・A-3号墳は程度の違いはあるものの横穴式石室が開口している。A-6号墳も羨道天井部に崩落部があり、横穴式石室の存在をうかがうことができる。これら以外にも、墳頂部に石材が露出するものがあり、この古墳群の埋葬施設として横穴式石室を想定

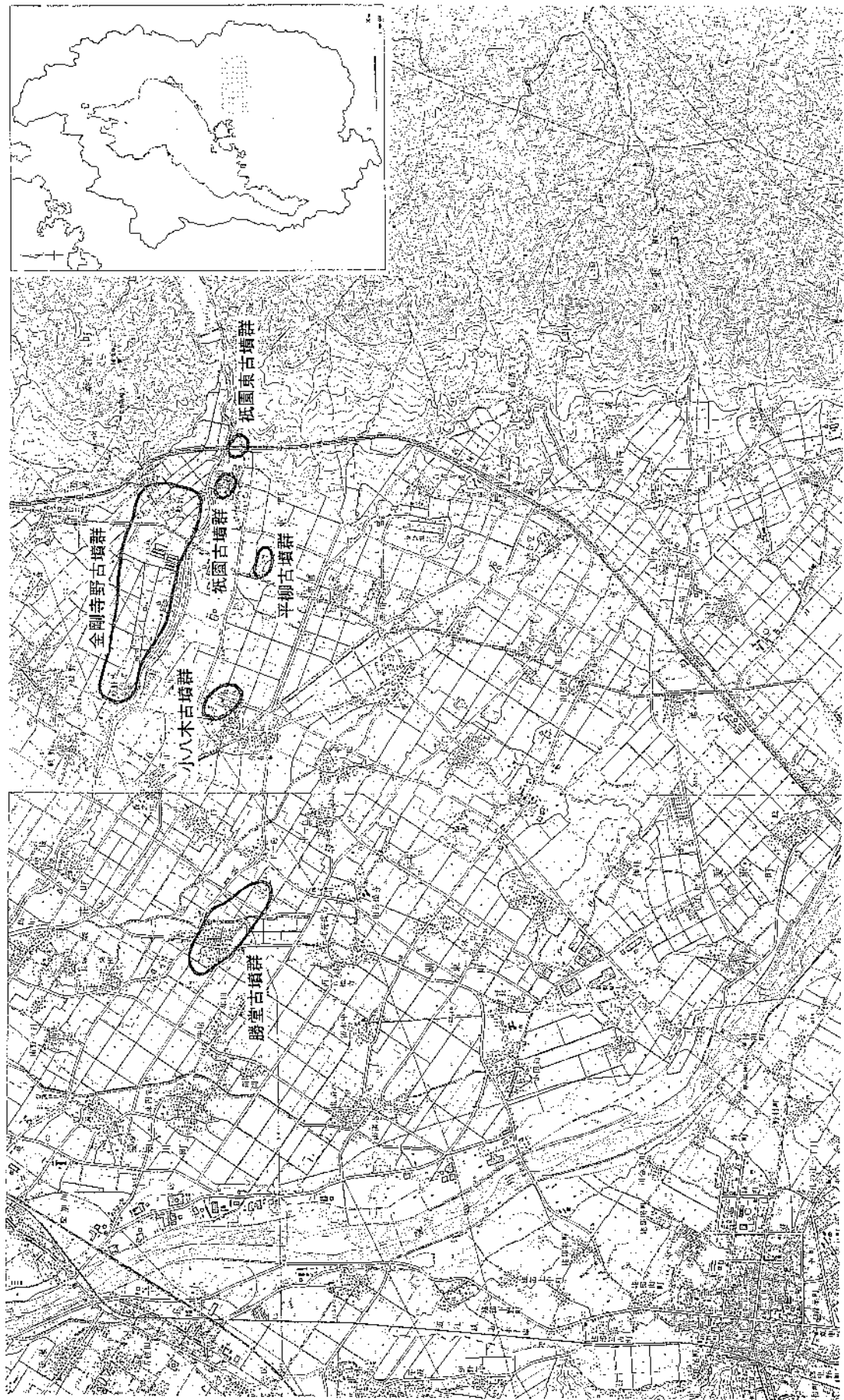


図1 平柳古墳群と主要古墳群 (S=1/50,000)

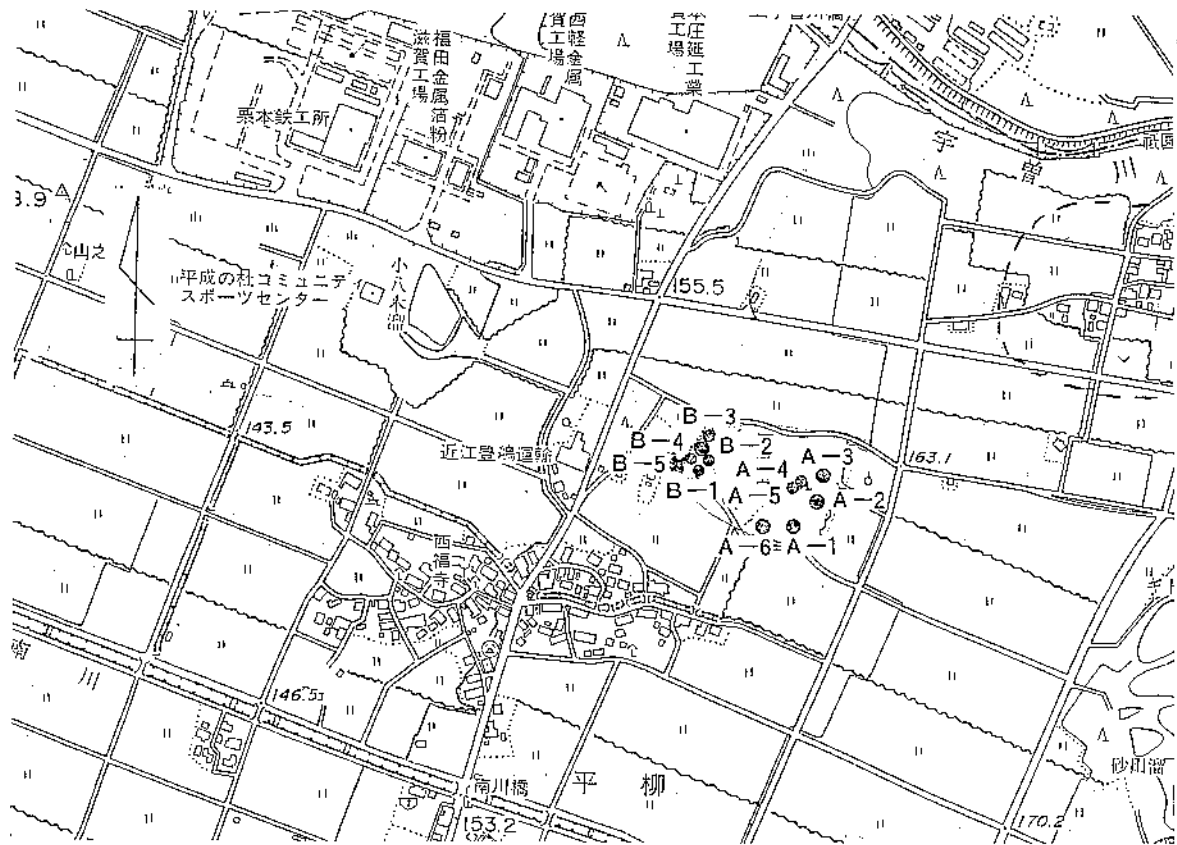


図2 平柳古墳群分布図

古墳名	墳形	内部主体	墳径	高さ	周溝
A-1	円墳	横穴式石室	17m	4m	4m
A-2	円墳	横穴式石室	18m	4.4m	2m
A-3	円墳	横穴式石室	25m	5m	5m
A-4	円墳	—	13.6m	1.5m	—
A-5	円墳	—	12.5m	1.5m	1.5m
A-6	円墳	—	17.5m	2.5m	3m
B-1	円墳	—	12.4m	1.7m	2m
B-2	円墳	—	12.7m	1.4m	2m
B-3	—	—	—	—	—
B-4	円墳	—	20m	2.2m以上	3m
B-5	円墳	—	14.8m	1.5m	3.5m

表 平柳古墳群略測データ

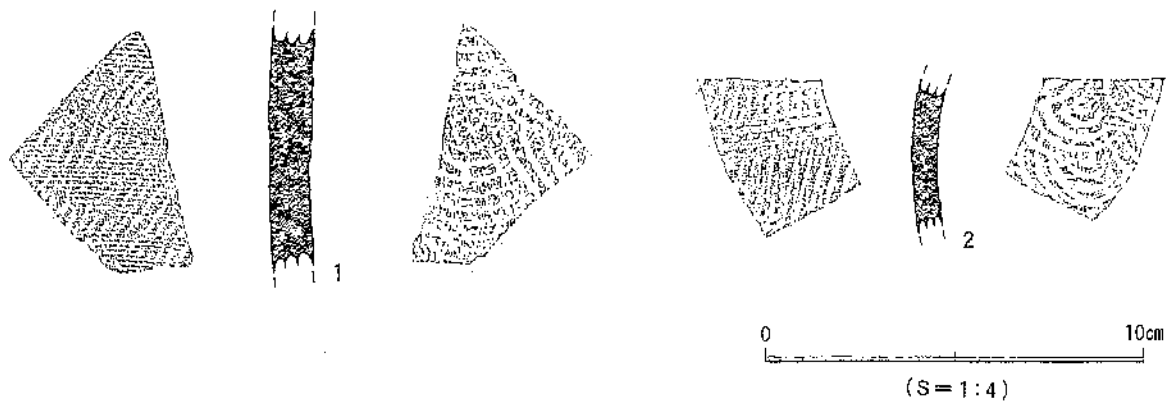


図3 採集遺物実測図

することが妥当であろう。群構成については、現在確認できる古墳のほかにもどのような古墳が、またどの程度の古墳が存在したのかなど不明な点が多く、正確な判断をすることは困難である。以上のような前提のもとに、この古墳群において、現在確認できる範囲で、その群構成上の要素をまとめてみると、大きく次の2点を指摘することができる。

a. 支群設定

一つは、天満宮の本殿を境にして東西方向に大きく二つの支群に分けられることである(図2)。

A支群 東側の支群(以下、A支群と称す)である。A-1号墳からA-6号墳までの6基から構成される。

B支群 西側の支群(以下、B支群と称す)である。B-1号墳からB-5号墳までの5基から構成される。

b. 墳丘規模・形態

2つめは、先に指摘した各支群は、含まれる古墳の墳丘規模・形態に違いを認めることができる(表)。

A支群 A-1号墳・A-2号墳・A-3号墳・A-6号墳の4基が、墳径が17~25m程度で、高さ3~5m程度の比較的大きな墳丘を持つ。それ以外のもは墳径12.5mと13.6m・高さ1.5m程度の比較的小さい墳丘を持つ。

B支群 概ね墳径が12.4mから14.8m程度で、高さ1.4mから1.7m程度の比較的小さい墳丘を持つ古墳が3基確認されており、B-11号墳のみが墳径20m・高さ2.2m以上と墳丘規模が大きい。

したがって、A支群では墳丘の規模が大きい古墳が主体的である、一方、B支群では墳丘規模の大きい古墳は客体的である。(中村)

(2) 採集遺物(図3)

古墳群とその周辺とを遺物の散布の有無に留意して踏査した結果、若干の採集遺物があった。

採集地点 古墳群の西南端にある稻荷神の小祠付近である(図2中の×地点)。祠の裏手には、残土による造成がなされている。採集地点の東方にはB-5号墳の削平面があり、この周囲には石室石材とおぼしき石材が集積されていた。

採集遺物 採集遺物は、須恵器体部片2点である。

1は甕体部片である。外面に平行タタキ痕跡とカ

キメ痕跡を残す。内面には同心円文当て具痕跡が確認できる。器厚が約1cmと厚く、甕体部と推定した。色調は暗灰色で、胎土は緻密である。

2は体部片である。外面には平行タタキ痕と沈線6条が確認できる。内面に同心円文当て具痕を残す。器厚は1に比して約0.8cmと薄く、かつ曲率が強いことから見て、大型の甕ではなく小型甕・壺類の体部片であろう。色調は暗灰色であり、胎土は緻密である。

いずれも細片のため、厳密な所属時期を確定することはできないが、採集地点が古墳削平部に近いことから、削平時に古墳から出土した可能性がある。

(山中)

3 A-1号墳測量調査の結果

A-1号墳について、墳丘測量および開口する石室の実測調査を実施した。以下、その概要を述べる。

(1) 墳丘(図4)

墳丘実測図については、細川修平氏等のご厚意に拠り、氏等が以前に作成された実測図を提供頂いた。それに基づき、今回一部追加修正し、報告している。これに基づいて、読み取りうる情報を以下に記述していく。

立地 墳丘は、南東から西北へ向かって、ごく緩やかに傾斜する平坦面に位置する。

遺存状態 墳丘の遺存状態は、石室の開口部付近と墳頂の北東部分とが若干えぐられている点を除けば、極めて良好であり、築造当初の様相とさほど変化ないものと思われる。

規模 墳丘は現状で墳丘部の直径約17m、周濠を含めれば直径約25m・墳丘の最大高さ約4mをはかる。

平面形態 平面形はほぼ円形を呈する。墳丘のまわりに、同じく概ね円形を呈する周濠が取り囲んでいる。

断面形態 饅頭形と称するのが最も適切であろう。側面から見ると、非常に腰高な印象を与えている。段築は確認できない。

外表施設 埴輪・葺石等の外表施設については、現状で確認できなかった。

周濠 墳丘周囲には周濠が完周する。周濠は幅4

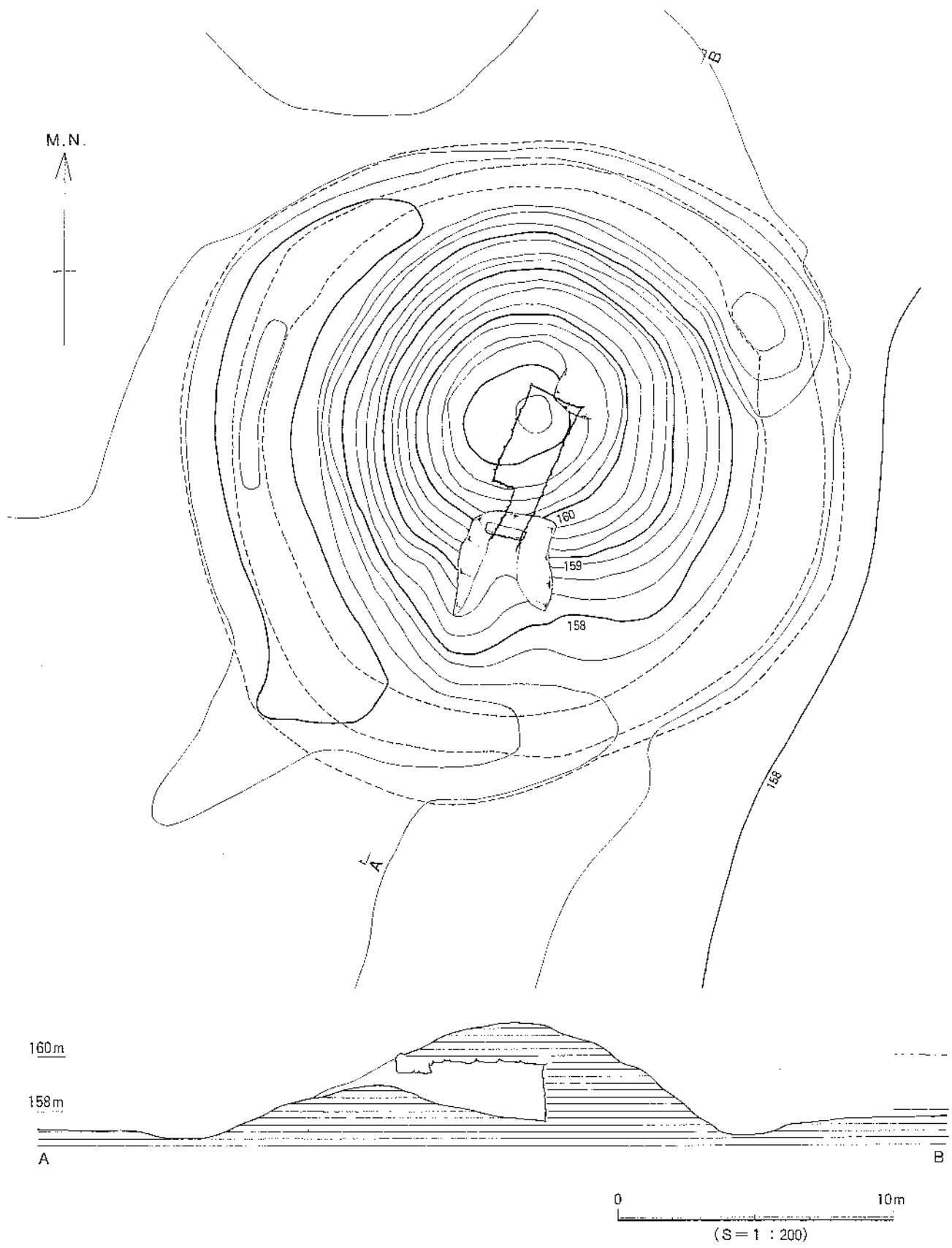


图 4 平柳 A-1 号坟冢丘实测图

m・深さ0.5m程度をはかり、現状では滞水していない。

石室配置 石室の配置は、石室の奥壁部分と墳丘の中心点とはややずれるものの、墳丘のほぼ中央部に構築される。(辻川)

(2) 石室 (図5)

内部主体は右片袖式の横穴式石室である。石室の構造および規模を把握することを目的として、縮尺1/20の実測図を作成した。これに基づき、看取しうる情報を、以下各項目ごとに述べていきたい。

石室主軸 石室はほぼ南南西方向に開口し、主軸方位は磁北に対して西に約22°振っている。

遺存状況 石室自体の遺存状況は良い。玄室においては石材の抜取りなどは見当たらず、羨道部分は玄門部より3石目まで天井石が残っている。盗掘の際には、この羨道部分から進入したものと考えられ、現在は開口部には大量の土砂が堆積し、スロープ状に玄室方向に延びている。現状では開口部は0.5m程度の高さしかなく、人ひとりが通れるほどしか開口していない。

a. 玄室

玄室の平面プランは長方形を呈している。規模は長さが左右側壁とも約3.4m、幅は奥壁部分において約2m、玄門部において約1.9mを測る。高さは現状では奥壁部分で約2m、玄門部で2.1mを測るが、開口部から流入した土砂の堆積を考えると、本来の高さはもう少し高いと考えても良いだろう。

壁面 壁面を構成する石材は角礫が主体である。壁面に顔料の塗布等や、石材間に粘土・漆喰等の充填は認められなかった。

奥壁 奥壁は右側壁側が土砂の堆積によって詳しくは分からないが、一段目に約1m以上×1m(高さ×幅)、約0.5m×0.7mを測り、周辺と比較しても大ぶりの石材を縦位に据えている。二～四段目には一段目と比較するとやや小さいものの0.3～0.5m×0.5～0.7mを測る石材を横位に架構し、五段目と天井の間には小ぶりの石を間に充填するような積み方が認められる。奥壁部分には明確な目地は確認できない。

左右側壁 側壁部分は左右両壁ともそれぞれ奥壁側の一段目に、0.5m以上×0.9mの長方形の石材

(左側壁)、0.5m以上×0.8m三角形の石材(右側壁)と他のものより大型の石材を据えている。それ以外は、0.3～0.5m×0.5～0.7mを測る石材を横位に架構し、その石材の間と間を埋めるように小石を充填している。積み上げの単位として、左右両壁にも五段目と六段目の間に、目地が見られた。ただし左側壁においては、最下段の奥から二石目において縦方向に目地が見られ、ここから奥壁側と玄門側の部分においては段違いであるが四段目と五段目に目地がみられる。左側壁の四段目と五段目、右側壁の五段目と六段目の目地が対応し、このラインを境に上方部分に持ち送りが認められる。また、このラインは玄門部(前壁の下面)のレベルと一致する。

袖部 袖部は最下段が土砂のため不明であるが、その上には約0.5m×0.7mの石材を横位に、約0.7m×0.6mの石材を縦位に架構し、その上に約0.7m×1.2mを測る石材を横位にして積み、前壁になっている。

天井 天井石は5石をほぼ水平に架構している。

b. 羨道

羨道部は現状で長さが左右両壁ともに約2.1m、幅は玄門部・開口部ともに約1m、高さは玄門部で1.5mである。

天井 天井石は現状で3石を数えるが、本来はもう1石架構されていた可能性もある。また、玄門部から2石目、3石目と順にやや高くなっている状況がうかがえるが、床面の状態が不明であることや3石しかないことからはっきりしたことは不明である。

壁面 羨道の壁面構成については、大半が土砂に埋もれているため得られる情報は少ないが、玄門部の石材は袖の部分にあたる右側壁は縦位に、左側壁は幅が1mを超えるような大ぶりの石材を使い、玄室との境を意識していることがうかがえる。右側壁は玄室とほぼ同程度の石材を横位に架構しているが、左側壁は小ぶりの石材を多用している。(堀)

まとめ

平柳古墳群の調査は全くの途上であるけれども、その過程においていくつかの問題点を見出すことができた。そこで、今回は調査の中間報告を兼ねて、これら問題点と調査研究の見通しについて述べるこ

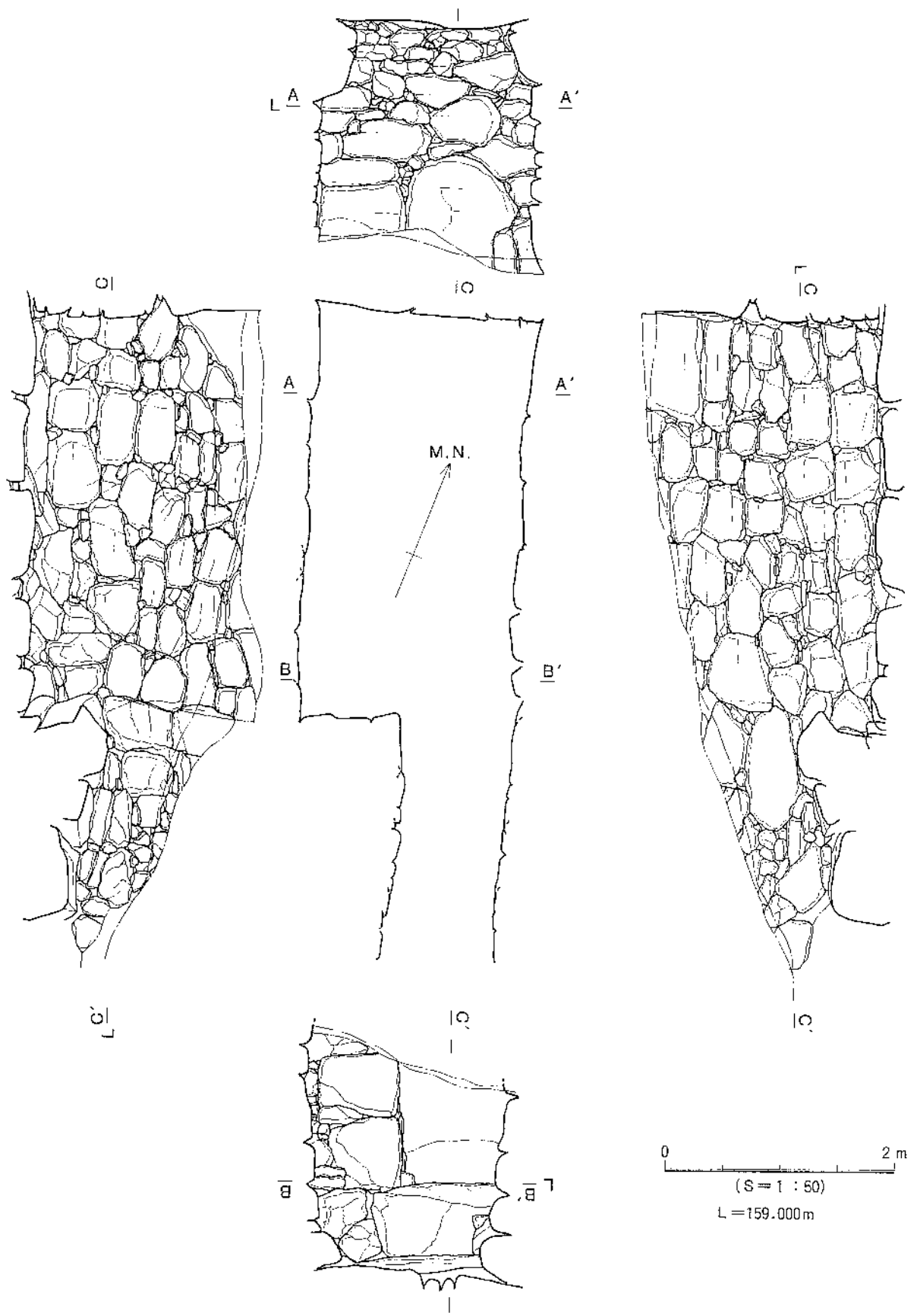


图5 平柳A-1号墳石室実測図

とにしたい。

(1) 群構成

平柳古墳群の最大の特徴は、遺存状態の良好さに加えて、古墳の規模と高さに見られる多様性にあるといえよう。第2章において触れたように、規模がおおむね17mを超えるものはいずれも3m以上の腰高な墳丘を持つものに対して、12m前後のものは1.5m程度の低墳丘をもち、墳径と墳高との間に相関関係が認められる。

このような相関性は何に起因するのであろうか。選択肢を絞りきることは、この場では到底為し得ないため、可能性を提示するに留めたい。それは石室構造そのものの違いと考えるものである。つまり、低墳丘な一群については「階段式石室」をもち、腰高な一群はいわゆる「畿内型石室」を持つと考えるのである。また、低墳丘の埋葬施設については、小石室を想定することも可能かもしれない。従来、このような墳丘規模の格差から、「社会的階層性」を導き出す傾向が強かった。この点については、今後実施予定の墳丘実測調査の結果を踏まえて、改めて検討することにした。

(2) A-1号墳

最後に、今回の調査成果を要約しておきたい。

a. 墳丘

- ①墳丘は、径17m・高さ約4mを測る円墳で、周濠をもつ。
- ②段築・埴輪・葺石等の外表施設は確認できない。
- ③石室は墳丘のほぼ中央に配置する。

b. 石室

- ①南へ向けて開口する右片袖の横穴式石室である。
- ②玄室平面は長方形を呈する。
- ③石室天井縦断部は平天井で、前壁を有する。
- ④玄室横断部の形状はほぼ長方形で顕著な持ち送りは認められない。

以上の諸特徴は、「畿内型石室」の範疇で捉え得るものと考えられる。

最後にその時間的位置づけを試みておこう。伴出遺物を知り得ないため、石室構造から推測する以外にない。大まかには比較的小ぶりの石材を用いることから、6世紀後半の中でも古い段階に位置づけ得ると考えている。少なくとも周辺古墳群-勝堂古

墳群赤塚古墳・行者塚古墳などの横穴式石室より先行する可能性は高いものと思われる。

以上、分布・実測調査の報告を述べてきた。先に触れたように、調査は途上にあり、次年度以降、各古墳の墳丘実測調査と開口する石室構造の把握につとめるとともに、勝堂古墳群をはじめとする周辺の古墳群の調査を進めていく予定である。

今回調査にご協力いただいた方々に改めてお礼申し上げますとともに、皆様には調査の結果を気長に見守っていただくよう、厚かましくもお願いして中間報告を締めくくりたい。(重岡・辻川)

註

- 1 本稿における「畿内型石室」概念は、土生田純之氏に拠る(土生田 1994)
- 2 今回の調査期間と調査参加者は以下のとおりである。
石室実測調査：1998年5月～12月
北原 治・重岡 卓・中村智孝・堀 真人・辻川哲明(財団法人滋賀県文化財保護協会)・山中 繁(仏教大学学生)
- 3 細川氏等による墳丘実測調査は1992年に実施されたものである。なお、墳丘図は(財団法人滋賀県文化財保護協会1996)において公表されている。

文献一覧

近江歴史クラブ(1997)「犬上川左岸扇状地の考古学的研究」：『紀要』10 財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県教育委員会(1996)「平成7年度滋賀県遺跡地図」
財団法人滋賀県文化財保護協会(1996)「第7回埋蔵文化財調査研究会シンポジウム 近江・河内・大和の渡来人」
土生田純之(1994)「畿内型石室の成立と伝播」：『ヤマト王権と交流の諸相』名著出版

編集後記

今回は、縄文時代から中世までの論考、および歴史学そのものに関する問いかけを掲載しました。——時は世紀末、新たな一世紀を我々はもうすぐ迎えようとしています。未来と現在を真剣に考え、そのために過去のデータを蓄積していく。それが文化財保護・考古学に携わる我々の責務の一つだと思われます。本号がその一助になるのを願ってやみません。(S)

平成11年3月

紀要 第12号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大苅町1732-2
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668